保津川・高瀬川の開削に従事
角倉了以（すみのくら りょうい）の偉業

すみのくら りょうい
角倉了以
（1554〜1614）
豪商・土木事業家

ときは戦国時代が終盤を迎え、徳川時代が幕を開けた、日本の大転換期。金融・貿易・土木事業の各分野で富を成し、「京の三長者」の一人として、また「河川大名」「水運の父」として全国に名を馳せた角倉了以。家訓の祖となった「舟中規約」はその崇高な思想をよく伝える。私財を投じての河川開削工事は、地域の産業・文化を大いに活性化した。当時の社会状況を描いた『当代記』は「比の者、徒者に非ず」と記している。

400年余り前、角倉了以・素庵親子によって開削された京都・高瀬川。

「人を捐てて己を益するに非ず」

「巨綱を巻いて座となし、犂（すき＝石斧）をもって杖となさん」との遺言で刻まれた了以座像。（大悲閣千光寺）

金融業から貿易商へ 進取果敢なチャレンジ

足利将軍家に仕える名医の息子として、京都の嵯峨に生まれた。父は明国に渡り、先進的な医学を修めている。その医業は弟が継ぎ、了以は家業の一つである土倉（質屋）の経営にあたった。

角倉一族は医師を多く輩出する一方、多様な経済活動を行い発展する。了以の祖父は、帯の販売権を掌握する座頭、また、土倉経営者として手腕を発揮した。祖父の商才、父の科学的思考や渡航経験が、了以の後の業績にさまざまな影響を及ぼすことになる。

文禄元年（1592年）には、豊臣秀吉の許可を得て朱印船貿易に乗り出し、安南国（ベトナム）との交易で財を築く。当時最大級の「角倉船」を設え航行したという。

特筆すべきは、船内スタッフに向けて作られた『舟中規約』全5条。「人を捐てて己を益するに非ず」という自他共利、他の国民や民族を敬う多様性尊重などがうたわれ、後世の家訓、社訓の礎となった。世界最古の経営倫理とも言われている。大航海時代末期にアジア東端で、企業の社会的責任（CSR）、持続可能な開発目標（国連SDGs）に通じる精神を述べ、実行した事実は驚きに価する。

土木事業に参入し 保津川・高瀬川を開削

江戸時代に入り、了以は保津川の開削工事を構想する。当時、保津川の水運は筏流しのみで、穀倉地帯・丹波の物資は人馬で京都まで運んでいた。了以は長男・素庵を幕府に送り、開削の許可を取り付ける。先行投資として工費を支払い、完成後に通航料を徴収し、一部を幕府に上納した。いわば民間資本による公共工事で、幕府・地域・角倉の三方にメリットを与えた。

工事は、巨石に綱を巻いて滑車で引いたり、岩を火で焼き砕く手法などを用い、わずか半年ほどで完成にこぎつけた。父譲りの探究心と、商いで培った多様な人脈が、成功を支えたと言われる。

この結果を受け、幕府は富士川と天竜川の疎通工事を依頼する。富士川の工事は完遂するが、天竜川の激流は制しきれず未完に終わった。

そして了以57歳の頃、京都二条と伏見を結ぶ新運河、高瀬川の開削に着手する。舟運に不向きな鴨川に沿って、安定ルートを設けるのが目的だ。完成後、海のない京都の街が、大坂を経由して各地の港とつながった。

高瀬川が完成して間もなく、了以は61歳で永眠する。晩年に選んだ隠居の地は、嵐山中腹の大悲閣千光寺。保津川、高瀬川を一望する秀麗の地だ。この寺院で、工事による死者の菩提を弔ったという。

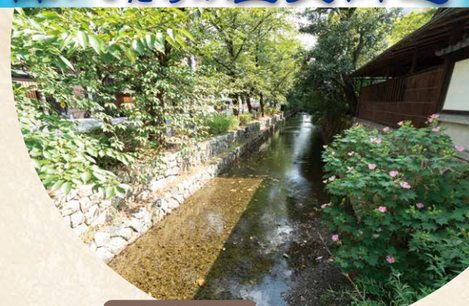
清水寺に奉納された「角倉船」の絵馬。

保津川開削工事を描いた絵図。巨石を綱で引き、石斧で掘り、岩を焼く様子を描写する。（京都 瑞泉寺）

水運の父「角倉了以」の足 跡を訪ねて（京都を歩く）

近世における河川事業の開拓者、角倉了以。土木事業者として鮮烈なデビューを果たした「保津川開削」、そして、最晩年に完成させた「高瀬川開削」。二つの事業について、ゆかりの地を訪ね、偉大な先人の業績・思想をたどろう。

桂川 渡月橋



高瀬川

1 がんこ二条苑高瀬川（角倉了以別邸跡）

（上）了以別邸跡の庭園。（下左）鴨川から引いた水が庭園内を流れ、潤わせている。（下右）木屋町通りに面した門。

「一之船入」の北東にある了以別邸跡。高瀬川の水は、鴨川から取水し、この別邸跡の庭園を経由して、木屋町通りの下をくぐり一之船入へ。邸宅の持ち主は政治家・山形有朋など名士を変遷する。

2 一之船入（いちのふないり）（二条）

高瀬川は、了以・素庵親子によって開かれたことから「角倉川」とも呼ばれている。二条と伏見をつなぐ全長約11.1kmの水路は、慶長19年（1614年）頃に完成、大正時代まで舟運が行われた。起点である二条に「一之船入」が残っている。船入とは、物資の積み下ろしや船の方向転換を行う船溜まりのこと。角倉家はこの前に屋敷を築き、舟の運航を監視した。現在、屋敷跡は日本銀行京都支店になっている。

一之船入には高瀬舟が浮かぶ。往時は曳き子が岸から綱で引いて運航した。

3 水の堰止めの石（御池通）

御池通と高瀬川が交わる少し南側に、川を横切る形で3個の四角柱が並んでいる。一辺15cmほどの地味な石柱だが、よく見ると左右の石柱に「コ」の字型、中央には「H」型の溝が刻まれている。この溝に板をはめ込んで水門とし、水位を調節した。雨量の過不足時、物資輸送を円滑に導くための工夫である。ちなみに、高瀬川の平均的な川幅は約8m、水深は約30cm。

石の溝に木の板をはめこんで水位を調整した。水量が少ない高瀬川には不可欠な工夫。

中央のH型石柱

高瀬舟

「元来たかせは舟の名で、その舟の通う川を高瀬川と言うのだから、同名の川は諸国にある」と小説家・森鴎外が、『高瀬舟縁起』で述べている。了以は、保津川工事の前に岡山の和気（わけ）川を旅し、その「高瀬舟」を見た。船底が浅く平たいので、水深が浅くても通行しやすい。そこで、保津川や高瀬川にこの舟を採用した。現在「一之船入」近くに舟が再現され、古き良き情緒を漂わせている。

4 花のいえ（角倉邸跡）

角倉の住居と船番所を兼ねた建物跡。通航する舟を管理し運航料を徴収した。現在は公立学校共済組合保養所「花のいえ」となっているが、広大な庭や、川に面した立地が当時をしのばせる。

桂川の左岸にある角倉邸跡。付近は現在も角倉町と呼ばれている。

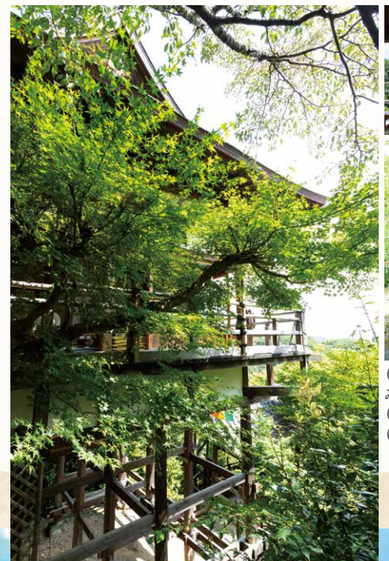
5 亀山公園（角倉了以立像）

大悲閣千光寺の対岸、亀山公園に建立された了以立像。大正時代に作られた像は第二次世界大戦下の金属供出で撤去され、昭和63年に再建された。この像も石斧を手にし、巨石の上に立つ。

石斧を手にした、険しい表情の了以像が、当時の工事の困難さを伝える。

6 大悲閣千光寺

嵐山の渡月橋から約1km、山腹に鎮座する寺院は幽境、桃源郷の趣。後嵯峨天皇の祈願所だった千光寺を、了以が現在地へ移した。本人の遺命で作られた了以像（P.12に掲載）は、かつて保津川を望む形で安置されていた。伊勢湾台風等により寺院は激しく損傷するが現在は修復。了以像のほか、儒学者・林羅山による了以顕彰碑などを見学できる。展望閣からの眺めは壮大で、了以の生涯や人物像を想像させる。



（左）了以が終の住処（ついのすみか）とした大悲閣千光寺。
（右上）眺望が見事な展望閣。
（右下）林羅山の了以顕彰碑。

〈左〉大悲閣千光寺 大林道忠 住職
〈右〉保津川遊船企業組合 豊田知八 代表理事

角倉了以を顕彰する

大悲閣千光寺 大林道忠 住職

眼下に保津川（桂川）と、了以の故郷・嵯峨、京都の街、そして比叡山や大文字を望む当山。丈夫な岩盤の上に建ち、水に恵まれた静かな理想郷として、了以が隠居の地に選びました。今から約30年前、存続の危機にあった当山を預かり、了以・素庵親子の顕彰に努めています。彼らの足跡を追い、また四季折々の景観に惹かれて国内外から人々が参拝されています。

保津川遊船企業組合 豊田知八 代表理事

今で言うなら、了以は総合商社とゼネコンを擁する財閥の総裁。あの時代に舟中規約という企業モラルを打ち出した、日本が誇るべき人物です。最初の土木事業である保津川開削工事は、民間資本のビジネスモデルとなりました。保津峡は、明治時代に入り「保津川下り」という観光資源にシフトします。英国王室はじめ世界の賓客が楽しみ、一大人気スポットとして定着しました。

世界のVIPも訪ねる保津川。